

キリストの聖体

2013.6.2

ルカ 9・11b-17

今日はキリストの聖体の主日です。第二バチカン公会議以前の頃に洗礼をお受けになった方々は覚えておられると思いますが、今日のご聖体の祝日は、その頃は木曜日に祝われていて、その日は守るべき祝日であると公教要理で習ったはずです。守るべき祝日とは日曜日と同じように、信者はミサに与るように定められていた日でした。第二バチカン公会議後の典礼刷新で、日本のようにこの日が休日になっていないところでは、このご聖体の祝日は、先週の三位一体の主日に続いて、聖霊降臨の主日の後の二番目の今日の主日に祝うことになりました。今でも一部のいわゆるキリスト教国で、聖体の祝日が休日になっているところでは、以前と同じように木曜日に祝われています。何故木曜なのかというと、ご聖体の祝日と呼ばれていたこの祭日が、聖週間の過ぎ越しの三日間の聖木曜日に記念した主の晩餐を改めて思い起こし、その最後の晩餐の席で、イエスご自身によって制定された聖体の秘跡への感謝を喜びのうちに祝う祝いだからです。

聖霊降臨の後の、教会の典礼の暦では年間の季節のこの時期に、あらためて主の聖体の祭日を祝うことには、特別な意味があると思われれます。今日私たちが祝う主の聖体の祭日は、暦に従って経過する時の流れの中に生きる私たちの信仰生活にとって、これまで祝って来た主の十字架の死と復活、そして、私たちの教会の出発点となった聖霊降臨の出来事と切り離された祝いであるのではありません。私たちがミサのたびごとにいただくご聖体は、それ自体主イエス・キリストの御からだであり、そのご聖体をいただくたびに、私たちは主イエス・キリストのいのちに結ばれ、信者として生きて行くためのいのちの糧をいただいています。けれども、聖体の秘跡に込められている恵みの神秘を信仰のうちに受け止め、その恵みにより豊かに生かされるためには、主イエス・キリストの聖体を中心とする教会の典礼全体が記念し、祝う、神が私たちのためにその御子イエス・キリストを通して与えてくださった救いの神秘に心を向ける必要があります。

私たちがいただくご聖体は、ミサの中心部分で司祭が唱える最後の晩餐でのイエスのおことばが指し示しているように、十字架の上で私たちのために渡されたキリストのお体であり、十字架の上で私たちのために流されたキリストの御血です。私たちの主イエス・キリストは、私たちに代わって十字架の上に死ぬことによって、私たちの人間としての全ての罪をゆるし、私たちに神の子としての新たないのちを与えるために、十字架に架けられてそのいのちをささげ

てくださったのです。私たちの主イエス・キリストが十字架の上にそのいのちをささげてくださることによって、私たちに与えてくださった新たないのちは、十字架上に死んで、復活された主イエス・キリストの復活によってもたらされた新たないのちです。イエスはこの新たな神の子としての復活のいのちに私たちを招き入れるために、私たちのために十字架上でそのいのちをささげてくださったのです。そればかりではありません。復活された主イエス・キリストは、その十字架の死と復活によってもたらされた神の子として生きる新たないのちが、世の終わりまで全ての人に届けられるように、弟子たちの心を開き、聖霊を与えてくださることによって、イエスの十字架死と復活による救いの新たないのちへの信仰の恵みを世界に向かって宣べ伝える者としてくださったのです。そして、弟子たちから始まった、この信仰の恵みを受け入れた人々の教会の中に、全能の神の力そのものである聖霊は、教会の祭儀であるミサと、その中心である聖体の秘跡を通して、今日もイエス・キリストの、神の子としての復活のいのちを現存させ、イエスの御体である聖体をいただく私たちにそのいのちを分け与えてくださるのです。

今日、主イエス・キリストのご聖体の祝日、主イエス・キリストがその十字架の死と復活をもって私たちにもたらしてくださった、神の子として生きる新たないのちにあずかるために、今も私たちの中に働く神の霊である聖霊が、教会の秘跡を通して私たち一人ひとりに分け与えてくださるこのいのちの恵みに大いなる感謝をもってあずからせていただきます。年間の最終主日である王であるキリストの主日までの、教会の暦の年間のこの季節は、私たちがそれぞれの人生を信仰者として生き抜き、最終的にイエスキリストのもとに集うその日までの私たちの信仰の旅を思わせます。暦に従って流れる時の流れの中を生きる私たちの信仰者として生きる日々が、その旅路を支えるいのちの糧として、今日も私たちに注ぎ込まれる愛のいのちそのものであるイエスのご聖体によって養われ、生かされる幸せを喜びあいたいと思います。

聖体を意味する教会のことばは幾通りかありますが、エウカリスチアという表現は、特に意味深いと思います。エウカリスチアということばは、最も普通には感謝を意味します。ミサの中のことばの典礼に続く、主の晩餐を記念するミサの中心部分、ラテン語ではエウカリスチアの典礼と呼ばれ、日本語では感謝の典礼と訳されています。エウカリスチアということばはもともとギリシャ語から来たことばで、その中には、ギリシャ語のカリス（恵み）ということばが含まれています。エウカリスチアはよき恵み、すばらしい恵みという意味にも取れます。聖体に凝縮されて示されている、イエス・キリストによってもたらされ、開かれた恵みの全てに感謝をささげて、私たちは聖体のうちに現存されるイエスとともに、父なる神に感謝の祭儀であるミサをささげるのです。

ミサにおいて捧げるエウカリスチア・感謝において私たちは、エウカリスチアである主のからだである聖体に養われて、その恵みへの感謝のうちに一つに結ばれるのです。この神への感謝を世の終わりまで、主が来られるその時まで、この世界に向かって告げ知らせることこそ、聖体のうちに凝縮された、神の私たちへの愛の恵みによって救われ、生かされている私たちのカトリック信者としての使命なのです。ミサの中で、聖体制定の晩餐のときの主のことばに続いて司祭は「信仰の神秘」と唱え、私たちは「主の死を思い、復活をたたえよう。主が来られまで」と唱えます。エウカリスチアのミサの祭儀にあずかり、神にエウカリスチア、すなわち感謝をささげることこそ、カトリックの信者としての私たちの生きる拠りどころであり、教会のエウカリスチアの祭儀であるミサに参加することによって、そのことを世界に向かって宣言することこそが私たちの使命なのです。今日、キリストの聖体の主日、特別な感謝の思いのうち私たちの信仰の神秘を祝って、今日も主イエスが分かち与えてくださるいのちに満たされて、このエウカリスチアのミサをともに捧げましょう。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高